

## 第117回日本精神神経学会学術総会開催にむけて

木下 利彦 Toshihiko Kinoshita  
日本精神神経学会理事,  
第117回日本精神神経学会学術総会会長

第117回日本精神神経学会学術総会のご案内をいたします。2021年9月19日から21日の3日間、国立京都国際会館で開催させていただくことになりました。昨今の新型コロナウイルスの蔓延で、フル企画 on site での開催が可能かどうか不確かな状況ではありますが、教室員一同懸命に頑張っておりますのでご期待ください。関西医科大学主催で1988年、前任の齋藤正己教授が大会長で大阪国際交流センターにて開催してから33年ぶりの開催であります。今回のテーマは、「革新と伝統が紡ぐ質の高い精神医学」とさせていただきます。

精神疾患の多くは病理所見を伴わない特殊性があり、内因性というような概念が長らく支配的でありましたが、近年の革新的な検査・治療法の開発で、その病態の解明に薄光がさすようになってまいりました。「氏より育ち」と昔から言われている環境因の大きさが依然難題として立ちまわっています。遺伝と環境、両者に関する最新のデータもご披露いただき、両者の関係性にも新たな解釈をしていただく予定しております。器質性疾患、特に認知症も大きな問題ですが、診断の精度を上げるための診断分類の精緻化および進行を食い止める治療法の開発などの詳細な検討も議論していただく予定であります。

特別講演を4名のご高名な先生にお願いしました。ノーベル化学賞を受賞された田中耕一先生に認知症の血液バイオマーカーについて、慶應義塾大学の岡野栄之先生には最新のiPS細胞を用いた精神疾患の分子病態研究について、関西医科大学先端研究センター長に就任予定の、米国国立がん研究所NCI tenure 主任研究員の小林久隆先生には最近承認された新しいがん治療である光免疫療法について、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議の実質上の責任者である尾身 茂先生には新型コロナウイルス感染症についてご講演をしていただく予定です。

また教育講演にも今回非常に力を入れました。56の教育講演を予定しております。国内演者44名、海外演者12名で、すべてをこの誌面でご紹介はできませんが、神田橋條治先生「臨床現場の疑問に答える」、北山 修先生「あの素晴らしい愛について：浮世絵にみる、日本の母子関係」、高橋琢哉先生「AMPA 受容体とトランスレーショナルリサーチ」、樋口 進先生「ギャンブル依存」、太田博昭先生「パリ症候群の今昔」、松本俊彦先生「最近の薬物関連精神障害の傾向と対策」、加藤 敏先生「グリジンガー」、古茶大樹先生「シュナイダー」、Stefan Leucht 先生「メタアナリシスについて」、Michael First 先生「ICD-11 vs DSM-5」、John Krystal 先生「最新の生物学的精神医学の動向」、Daniel Mueller 先生「遺伝学と臨床精神薬理学の融合と実践」などをお話しいただく予定です。最新の脳科学、19世紀から20世紀にかけての精神医学の巨人の足跡、芸術と精神医学と大きく3つのジャンルに関する内容となりました。大会のテーマである革新を経糸に伝統を緯糸に織り上げて参りたいと考え広範囲に及ぶ企画を組みました。ご期待いただきたいと思います。さらに4名の先生(西園昌久先生、小山 司先生、小島卓也先生、牛島定信先生)に「先達に聴く」と題して若い精神科医に精神医学の奥深さや面白さをお話しいただきたいと考えております。

コロナ禍による甚大な影響は、当然のことながら社会生活全体に未曾有の変化をもたらしております。自殺者もかなり増加しています。精神医学の必要性がますます高まっているようです。精神医学の質の向上に少しでもお役に立てればと祈念しております。ワクチンが接種されコロナ禍が沈静化し京都国際会館で皆様に直接お目にかかれまことを強く希望し117回日本精神神経学会学術総会の大会長挨拶とさせていただきます。